

No.2706

清朝施設の変遷から見るラサ社会の清朝施政の受容のあり方

西藏大学 旅遊与外語学院 日本語講師

野崎 くるみ

本研究は清朝の施政をチベット社会がどのように受け入れたか（受け入れなかったか）、またチベット社会の清朝に対する認識や社会の状況が清朝の対チベット政策をどのように規定したかを検討したものである。本研究は当初の目的に沿った運用がなされなかったことを理由に、清朝のチベット政策は機能していなかったと結論付けるものではない。清朝の政策や文物が権力者の必要やチベット社会情勢の変遷により、その都度新たなコンテキストの中で語られていくさまを俯瞰することで、より広い視覚から清朝とチベット社会の関係を抽出することを目的とした。

具体的にはフィールド調査と文献調査を同時に行った。まず、ラサ、シガツェ、及び近郊都市の（1）碑文（2）関帝廟（3）土地の字を調査し、歴史史料、各時代の旅行記や報告書、ネーイグ（チベット語の聖地誌）などを参考に時代ごとの変化を追った。この作業により、チベット社会は施政者の意図と無関係に、清朝の文物をチベット文化のコンテキストの中に取り込んでいったとの結論に達した。

また、チベット語史料、漢語史料、満洲語史料などを用い、1793年公布の「29条章程」を起点とし、清朝の各種政策がチベット社会の中でどのように運用されたか、あるいはチベット社会の要請が清朝のチベット政策をどのように規定したかを検討した。特に、チベットで絶対的な信仰を集めていた宣託僧チューキョンの存在に着目し、乾隆帝の強い排除命令から現実に即した妥協策、存在の黙認、積極的な働きかけまで、清朝の対チューキョン政策が変化していくさまを明らかにした。さらに9世から12世ダライラマまでの選出の過程を文献史料より検討し、「29条章程」第一条金瓶掣籤制度が、時代ごとの清朝とダライラマ政権の権力者、チベット社会情勢のそれぞれの要請に基づき、そのたびに新たな解釈がなされていたとの結論を得た。